4. 信念

預言者のモスク（サウジアラビア・メディナ）

信念とは

- 人々の日々の生活にエモーショナルな動機づけ（インセンティブ）を与え、秩序立った生活態度をもたらす、ダイナミックな活力の源泉

⇒インセンティブ：費用と便益を比較する人びとの意思決定や行動を変化させるような誘因：行動経済学

- 社会生活における学習や教育によって後天的に獲得されるものであり、所与として与えられる時間と空間の拘束のなかで無自覚な形で形成される

⇒経済行動と道徳（アマルティア・センの経済倫理学）

- 運動を継続させる推進力

⇒イデオロギー

心的構造

アンドレ・ヴァラニャック『エネルギーの征服ー成熟と喪失の文明史』
新泉社、1979年、14、19頁

- それはさまざまなエネルギー形態やその生物学的および工業的変遷を体系的に研究し、人類が使用してきた原動力の歴史を考えてみよう、というものなのである。そればかりではない。この学問は、さらに、しかじかの原動力を主にどのように利用するか、そのことと文明（文化）のもつ社会的・精神的様相との間の対応関係を明らかにしようとするものでもある。したがって、「文化力学」は単に文化的－社会学的、心理学的－側面だけでなく、物理的側面をも同時に含んでいる。
- 要するに、社会的実践（praxis）のあらゆる異なった段階に対し、さまざまな形において社会構造が対応しているのみならず、本来的な心的構造までが即応している、ということになる。ところで、この心的構造は、それぞれのエネルギー情況に密接に依存しており、かつまた、もし新しいエネルギー源の出現でその情況に変化が生じれば、自ら変化しはては消滅に向かうべく定められた日常的な≪基礎的体験≫にも基づいているのである。

エートス

マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
岩波文庫、2007年、47－48、5頁

- それればかりか、この「倫理」の「最高善」ともいうべき、一切の自然な享楽を厳しく斥けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は、幸福主義や快楽主義などの観点を全く帯びていず、純粋に自己目的と考えられているために、個々人の「幸福」や「利益」といったものに対立して、ともかくまったく超越的なまたおよそ非合理的なものとして立ち現れている。
- いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤において、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性をもつような発展傾向をとる―と少なくともわれわれは考えたい―文化的諸現象が姿を現すことになったのか。

イデオロギー

マクシム・ロダンソン『イスラームと資本主義』
岩波現代選書、1978年、18頁

- つまり、ある時代、ある宗教に属する人々は、社会全体もそうだが、自分たちの作ったものではない、先在する教義にげんかくに服従し、その掟をまもり、なに一つ本質的に変えることなくその精神を墨守するものであり、自分たちの生活条件やこの生活条件が暗黙のうちに作用する自分たちの思考形態に、教義を順応させようともしないものだ、ということが仮定されているからである。

共感（同感）
アダム・スミス『道徳感情論』1部1編1章

- 人間がどんなに利己的なものと想定されうるにしても、明らかに人間の本性の中には何か別の原理があり、それによって、人間は他人の運不運に関心をもち、他人の幸福を ― それを見る喜びの他には何も引き出さないにもかかわらず ― 自分にとって必要なものだと感じるのである。この種類に属するのは、哀れみ（ピティー）または同情（コンパッション）であり、それは、われわれが他の人びとの悲惨な様子を見たり、生々しく心に描いたりしたときに感じる情動（エモーション）である。われわれが、他の人びとの悲しみを想像することによって自分も悲しくなることがしばしばあることは明白であり、証明するのに何の例を挙げる必要はないであろう。

アダム・スミス『道徳感情論』

- われわれは、他の人びとが感じることについて、直接の経験をもたないのだから、かれらがどのような感受作用をうけるかについては、われわれ自身が同様な境遇においてなにを感じるはずであるかを心にえがくよりほかに、観念を形成することができない。われわれの兄弟が拷問台上にあっても、われわれ自身が安楽にしているかぎり、われわれの諸感覚（センス）が、かれがうけている苦痛をわれわれに知らせることはけっしてないだろう。それらがわれわれを、自分たちの身がらをこえたところまで運ぶことは、けっしてなかったし、けっしてありえない。そして、かれの諸感動（センセイション）がどうであるかについて、われわれがなにかの概念を形成しうるのは、想像力だけによるのである。その能力もこのことについてわれわれを助けうるのは、もしわれわれがかれの立場におかれたならばわれわれ自身の諸感動はどうだろうかということを、われわれに提示するよりほかのどんな方法によってでもない。われわれの想像力が写しとるのは、かれのではなくわれわれ自身の、諸感覚の印象だけなのである。想像力によってわれわれは、われわれ自身をかれの境遇におくのであり、われわれは、自分たちがかれとまったく同じ責苦をしのんでいるのを心にえがくのであり、われわれはいわばかれの身体にはいりこみ、ある程度かれになって、そこから、かれの諸感動についてのある観念を形成するのであり、そして、程度はもっと弱いがまったくそれらの感動に似ないのでもないものを、なにか感じさえするのである。（後略）